

書評 濱和弘『傘の神学Ⅰ 普遍啓示論 ——そこに立ち現れる神』

野村天路

序言

著者の濱氏は、東日本大震災の被災地にて、「今まで私が習い培ってきた救済論は、ここでは通用しない」という揺らぎと「神の存在への疑念」という揺らぎを覚えたという。そのような中でも「それでも神はいる」という言葉が頭の中に響くという経験を経て、神学的思索をまとめたものが本書である。このような神学的な営みに同じ信仰者として敬意を表したい。

しかしながら、本書には、伝統的な福音主義神学の問い直しや再構築という内容も含まれている。筆者は、本書によって問い直される伝統的な福音主義の立場に立つ者であるので、何らかの応答の責任があると受け止めた。本来は、「罪の赦しの福音」の限界ということを取り上げたいところではあるが、この問題は、本書の中心的な主題ではなく、またこの書評の紙面にも筆者の能力にも限りがあるので取り上げることはできない。そのかわりに、本書全体に展開されている宗教多元主義の問題と普遍啓示による神認識の限界の問題を取り上げて、濱氏の神学に対する応答としたい。

1. 宗教多元主義的な見方について

(1) 本書に展開される宗教多元主義

本書では、宗教多元主義的な視点に立って神の存在や宗教について議論が展開されているように見受けられる。実際、濱氏は、次に引用するように、本書の冒頭において宗教多元主義的な見方をとっていることを認めている。

本書は、その啓示の問題に「神はいる」ことを中心に向き合い、取り組んだ中から生み出されたものです。

その際、従来の神学的な方法ではなく、宗教哲学的な視点から神の啓示を考えました。後に詳しく述べますが、神学において「神はいる」とは論証不可能な信仰の事実として前提となっている事柄だからです。まずは「神はいる」ことを、人はどのようにして受け入れることができるかを考えることから始める必要があると考えたからです。そうすると、必然的に宗教全般の根底にある超越的存在を感じ取る宗教経験が問題となります。そのような視点は、必然的に宗教多元主義的な見方になります。¹

宗教多元主義といっても、実際の内容は、それぞれに異なっているが、本書での宗教多元主義は、ジョン・ヒックの主張するような宗教多元主義であると思われる。ヒックは、究極的な神的実在に対して人間が応答するという人間の普遍性を主張する。そのような人間の普遍性がそれぞれの文化的な状況の中で、独自の宗教的伝統として独特の形態をとるようになっていったとする。現実にはさまざまな宗教が存在するが、それらの個別宗教は、究極的な神的実在に対する応答の形態の一つであり、宗教には、自我中心から実在中心への人間存在の変革という本質が存在するという。²

濱氏もまさしくこのような宗教多元主義的な立場に立って、普遍啓示論を展開している。すなわち宗教を宗教ならしめる本質を、神性を直観する宗教経験として、このような経験がそれぞれの文化的な背景に基づいた認識によって認識されることによって個別の宗教経験となることが第1章において論じられている。その上で、第2章では、「キリスト教の本質」として上記のような普遍啓示論からキリスト教の礼拝と信条と教会を論じ、宗教多元主義的な視点で再

¹ 濱和弘『傘の神学Ⅰ 普遍啓示論——そこに立ち現れる神』（ヨベル、2024年）8-9頁。以下『普遍啓示論』と略す。

² ジョン・ヒックの宗教多元主義については、ヒック『増補新版 宗教多元主義——宗教理解のパラダイム変換——』（法藏館、2008年）と間瀬・稲垣編『宗教多元主義の探求』（大明堂、1995年）を参照した。